

流し・ヴァイオリン

流し

これは私がまだ若く酒場に行っていた頃の、今はもう失われてしまった風俗の話である。

北島三郎歌唱による流しのギター弾きの心意気を歌った『ギター仁義』は、私の好きな演歌の一曲である。昔は私が行く小田原の場末の飲み屋にも流しのギター弾きが来た。それがいつの間にか姿を消した。衰退の原因は言うまでもなくカラオケの出現で、客が「聴く人」から「歌う人」に変わってしまったからである。新聞によると、東京の新宿では最盛期の東京オリピック(昭和三十九年)の頃には、百人以上流しがいたというから今昔の感に堪えない。私は歌うのが好きだからカラオケは嫌いではない。が、流しのギター弾きが姿を消したのはなんとも寂しい。演歌師によっては歌の下手な者もいたろうし、彼らがとかくヤクザと結びついているという批判もあろうが、はじめをづけければそれなりの楽しみ方はあったのである。

私が聴いていた頃は三曲で千円が相場だった。いつも

五、六曲は頼んだ。生の声で聴けるのだから安いものである。私は流しが来たら断ったことは一度もなかった。場末の飲み屋に来たのは、ハマちゃん、モウさん、グンちゃんといった演歌師だった。二人組で来るのである。ハマちゃんは柔らかな美声でいちばん歌がうまかった。モウさんは渋い玄人好みのする歌い方だった。グンちゃんは二人に比べると下手だが誠実な歌い方をした。

流しは夜の町の風物詩とあってよかった。年を取ってからも高校の同窓会の幹事をやっているの、打合せ後に友人達と酒場に行くことも何度かあった。そして酔客が声を張り上げてカラオケを歌うのを見ると、時には流しの歌に耳を傾けながら静かに熱爛を嗜むのも粋なものではないかと思つた。

ヴァイオリン

現在私は八十四歳であるが、この作品も音を追想したものである。

少年時代から私が持っていた楽器は、ハーモニカとトランペットとヴァイオリンであった。いちばん小さいときか

ら親しんだのはハーモニカであった。小学校に入学するとすぐ姉に教えてもらって吹いた。トランペットは中学一年生の時ブラスバンド部に入って鍛えられた。その後母に買ってもらって就職するまで吹いていた。

ヴァイオリンは小学四年生の時自分の貯金で買った。私は小さい頃からヴァイオリンの持つ音色とその姿形に魅せられた。どうしても欲しくなって数年間貯めた小遣いをはたいて購入した。親に多少援助してもらったが。ここまでは感心な話である。だがとうとうヴァイオリンでドレミファすら演奏することもなく終わってしまった。姉たちの勧めに従わず習いに行かなかったからだ。

もし当時が現在のような世相であつたら、否応なく習いに行つたかもしれない。戦後の食糧事情の悪い時代にあつて、庶民はヴァイオリンどころではなかったのである。母は子供の教育には熱心であつた。が、いやがる子供の尻をたたいてまで無理にけいこごとをさせるほどではなかった。それより私がヴァイオリンを習わなかった本当の理由は、自分にはとてもこの楽器を弾きこなす才能がないと子供心にも直感で悟つたからである。何年間もの夢がなくなつて手にしたその楽器は、高貴で難解で、文字どおり私の手に

あまるしろものであつた。それでも普通の子だつたら挑戦したかもしれない。しかし私は時々ケースを開いてはただ眺めるだけであつた。私にはそういう諦めのよさがある。言いかえれば消極的で意気地がないのだろうか。

話を元に戻そう。私のヴァイオリンが一度だけ目のを見たことがある。私が中学二年生の時の学校の音楽会で、一学年上の近所の女子生徒が私のヴァイオリンで全生徒の前で独奏した。たまたま彼女のヴァイオリンがこわれてしまったので貸してあげたのである。その時の演奏は自分が弾いたように嬉しかった。日陰者の愛蔵品への罪ほろぼしのような気がした。そのヴァイオリンもトランペットも、昭和四十二年二月に起きた生家の火事で失われてしまった。現在の私はもっぱら音楽の愛聴者である。その中でもヴァイオリンの曲は好きだ。特にベートーヴェンの『ヴァイオリン協奏曲』やバツハの『無伴奏パルティータ』などはすばらしい。

あの子供の時から少しでも習っておけば、右のような難曲はとても無理だとしても、やさしい曲の一つや二つぐらい弾けるようになっていたかもしれないのと残念に思う。

(完)